

463 SLE合併妊娠における血漿トロンビン-アンチトロンビンⅢ複合体測定の意味

順天堂大

中村 靖、伊藤 茂、淡路正則、宮崎亮一郎、
吉田幸洋、深間内一孝、三橋直樹、桑原慶紀

〔目的〕SLE合併妊娠のうち、病状が安定していながらも妊娠の転帰が不良な例があり、このような例で血漿トロンビン-アンチトロンビンⅢ複合体(TAT)の妊娠中における推移と、SLE合併妊娠におけるその測定意義について検討することを目的とした。〔方法〕合併症のない妊婦よりのべ122件のTAT計測を行い、その妊娠週数毎の正常値を求めた。SLE合併妊娠症例14例についてその妊娠経過中におけるTAT値の推移を調べ、正常群とmean±1.5SD以上の異常高値を示す群における妊娠予後について検討した。SLE合併妊娠例のうち、異常高値を示した群の一部症例に低容量アスピリン療法(81mg/d)を試みた。〔成績〕正常妊婦におけるTAT値は、妊娠7～8週で $2.87 \pm 1.00 \text{ ng/ml}$ (mean±SD)、21～22週では $8.67 \pm 4.16 \text{ ng/ml}$ 、27～28週で $10.53 \pm 3.98 \text{ ng/ml}$ 、35～36週で $14.37 \pm 5.06 \text{ ng/ml}$ と直線的な上昇傾向を認めた。SLE合併妊娠14例中でTAT高値は4例においてみられ、このうちアスピリン投与を行わなかった2例については妊娠中期(27週、29週)に妊娠の中断を余儀なくされた(いずれも帝王切開)。アスピリン投与をおこなった2例は投与後、いずれもTAT値が正常化し、満期まで管理可能であり、胎児発育遅延もみとめられなかった。妊娠全期間を通してTAT値が正常に推移した10例では全例妊娠予後は良好であった。〔結論〕SLEにおけるfetal wastageの一因として、母体の凝固亢進状態が考えられ、その検索法としてTAT計測の有用性が示された。またTAT高値例に対して低容量アスピリンによる抗凝固療法の有用性が示唆された。

464 脳質周囲白質軟化症(PVL)における嚢胞形成時期と産科因子の関連性について

都立築地産院産婦人科

山口 暁、小川隆吉、大森意索、漢那 顕、
小林信一、升田春夫、平山恵子、渡辺 徹、
藤井 仁

〔目的〕脳室周囲白質軟化症(PVL)は、脳性麻痺の原因として注目されるが、その発症機序に関しては不明な点も多い。そこで、PVL発症症例を嚢胞形成時期でわけ、産科因子との関連性について検討したので報告する。〔方法〕PVLと診断された新生児20例を、脳質深部白質に嚢胞形成を認めた時期により、出生直後から嚢胞形成を認め胎内発症と考えられた症例(A群)、生後早期(生後4週間)までに嚢胞形成を認めた症例(B群)、生後5週以降に嚢胞形成を認めた症例(C群)の3群にわけ検討した。〔成績〕①PVL 20症例でA群は2例(10%)、B群は8例(40%)、C群は10例(50%)であった。②A群、B群、C群の平均在胎週数・出生体重はそれぞれ36.5週、29.8週、30.2週、2250g、1343.8g、1240.4gであった。③A群はいずれも単胎、経膈分娩症例で胎児仮死、新生児仮死、前期破水(PROM)は認めなかった。④B群の8例中6例は多胎妊娠(一絨毛膜双胎3例、二絨毛膜双胎1例、品胎2例)で双胎間輸血症候群を2例に認めた。経膈分娩は3例のみで、PROM 5例、胎児仮死4例、新生児仮死1例を認めた。⑤C群の10例中8例は多胎妊娠(一絨毛膜双胎5例、二絨毛膜双胎2例、品胎1例)であった。8例が経膈分娩でPROM 3例、胎児仮死1例、新生児仮死1例を認めた。〔結論〕PVLはそのほとんどが在胎27週以降34週未満での発症で、PVL発症と在胎週数には特異性を認めた。一絨毛膜双胎、品胎が多数例をしめ、胎盤での血管吻合、胎児間の循環の共有といった胎内環境もPVL発症に関与することが示唆された。出生後比較的早期にPVLを発症した症例(B群)で、顕性の新生児仮死例は少ないものの、PROM、胎児仮死などの合併例が多く胎内環境の悪化がPVL発症に関与すると考えられた。しかし、半数の症例(C群)は、生後5週間以降での発症で、出生後の新生児管理との関連性も示唆された。